

東由利村報

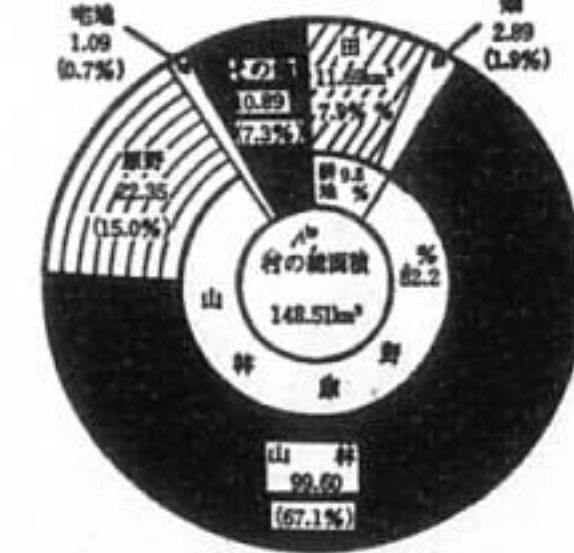
No. 168 1971.7.1

発行 秋田県東由利村役場 印刷 KK本間印刷所
毎月1日発行(1部8円) 昭和42年7月21日第三種郵便物認可

世帯と人口

一般会計 1,569世帯 7,132人
特別会計 3,510人
内訳 3,622人
前月に比し世帯は1の減、人口は6の増

財政
434,731千円
230,342千円
93,370千円
125,632千円
内訳 927千円
10,413千円
国保 黒診簡水玉財
山林 泉



二十年を要し完成

進む 地域 滝まで 一〇キロ



本村側寺山地内=木材を運び出すため早くも活用されている。この附近には古くからの名湯「若林の湯」があり車を横づけできる。一方、春には、せんまいやわらび、秋には、あかぼっこなどきのこが豊富である。

村長選挙三十一日に

七月三十一日午後七時から 役場会議室。

革新票上まわる

参院選・本村では初めて

任期満了とともに、本村村長選挙の日どりが決まった。本村選舉管理委員会(小笠原武一會長)は、六月二十五日会議を開き、八月十九日で任期が満了する、村長選挙の日程を協議、その結果、投票日を七月三十一日になど、つゝいとおり決めた。

選挙の告示日七月二十四日選挙の投票日七月三十一日開票の時刻と場所

八〇・〇三刻で終った。これ

は本村の黒沢地区と大内町地区との距離が大巾に短縮された。また、この林道の完成は、矢島町と本村を結ぶ、軽井沢林道に連絡するところから、矢島—東由利—大内—大曲—秋田のルートを形成したこととなり、出羽山地縦貫林道と呼ばれる、林業上の効果をえた要路として期待されるにいたった。

歩が文字とおりの「足」で徒歩が文字とおりの「足」で

あった時代には、本村の黒沢・大内町地区と、大内町地区は同一の生活圏として日常の交流がひんぱんであった。

しかし自動車が発達するに

したがい、至近距離とは、かならずしも距離の遠近ではなく、そこに道路があるかないが決め手となる、両地区は本庄市を通じて交流しなければならない、不便な地域と化してしまった。

昭和二十六年に着工、以来二十年間の歳月を要した黒沢林道、延長九、九九九筋が完成、大内町地区との距離が大幅に短縮された。また、この林道の完成は、矢島町と本村を結ぶ、軽井沢林道に連絡するところから、矢島—東由利—大内—大曲—秋田のルートを形成したこととなり、出羽山地縦貫林道と呼ばれる、林業上の効果をえた要路として期待されるにいたった。

歩が文字とおりの「足」で徒歩が文字とおりの「足」で

あった時代には、本村の黒沢・大内町地区と、大内町地区は同一の生活圏として日常の交流がひんぱんであった。

しかし自動車が発達するに

したがい、至近距離とは、かならずしも距離の遠近ではなく、そこに道路があるかないが決め手となる、両地区は本庄市を通じて交流しなければならない、不便な地域と化してしまった。

昭和二十六年に着工、以来二十年間の歳月を要した黒沢林道、延長九、九九九筋が完成、大内町地区との距離が大幅に短縮された。また、この林道の完成は、矢島町と本村を結ぶ、軽井沢林道に連絡するところから、矢島—東由利—大内—大曲—秋田のルートを形成したこととなり、出羽山地縦貫林道と呼ばれる、林業上の効果をえた要路として期待されるにいたった。

歩が文字とおりの「足」で徒歩が文字とおりの「足」で

あった時代には、本村の黒沢・大内町地区と、大内町地区は同一の生活圏として日常の交流がひんぱんであった。

しかし自動車が発達するに

したがい、至近距離とは、かならずしも距離の遠近ではなく、そこに道路があるかないが決め手となる、両地区は本庄市を通じて交流しなければならない、不便な地域と化してしまった。

歩が文字とおりの「足」で徒歩が文字とおりの「足」で

あった時代には、本村の黒沢・大内町地区と、大内町地区は同一の生活圏として日常の交流がひんぱんであった。

しかし自動車が発達するに

したがい、至近距離とは、かならずしも距離の遠近ではなく、そこに道路があるかないが決め手となる、両地区は本庄市を通じて交流しなければならない、不便な地域と化してしまった。

歩が文字とおりの「足」で徒歩が文字とおりの「足」で

あった時代には、本村の黒沢・大内町地区と、大内町地区は同一の生活圏として日常の交流がひんぱんであった。

歩が文字とおりの「足」で徒歩が文字とおりの「足」で

あった時代には、本村の黒沢・大内町地区と、大内町地区は同一の生活圏

